

ひとりの女性の話

田川 玄

これからわたしは、ひとりの既婚女性の半生を手短かに述べる。彼女はエチオピア南部のオロモ語系牧畜民族ボラナの女性だ。わたしは彼女のことを「おばちゃん」とボラナ語で呼んでいた。だから、ここでも単に「おばちゃん」とだけ記そう。この身の上話は何も彼女だけでなく、ボラナの既婚女性が多かれ少なかれ陥りかねない境遇である。ただ、おばちゃんはその解決法が他の女性よりもほんのちよっぴり違っただけだ。わたしの話そのものは、おばちゃんやその周りの人々から、断片的に聞いたり見たりしたことである。それをわたしが、なんとなくひとつにつきあわせてみた。話をはじめよう。

おばちゃんは、呑んだくれ亭主から逃げ出してきた人だ。おばちゃんといっても正確な年は分からない。当人だって知らない。推測するに三十半ばだろう。おばちゃんを育てたのは彼女の産みの親ではない。赤子の頃に貰われていった。貰われた先は、その昔、ボラナで一番たくさんのウシをもっていると言われた男だった。ウシ持ちと、彼女の両親とのはっきりとした関係は忘れてしまったが、遠い親戚程度だったろうか。おばちゃんがお父さんと呼んでいたそのウシ持ちは、ソマリがエチオピアに侵攻したときに殺されてしまった。その後、ひとりの男がぜひおばちゃんを嫁に貰いたいと、ウシ持ちの家族に頼みこんだ。おばちゃんはやがて少女となり、その男のもとに嫁いだ。

所帯を持ったばかりの夫婦はとてつもなく貧乏だった。一日の食事がわずかコップ一杯のトウモロコシだけのときもあったが、それを二人で分け合っ



ラクダに引越しの荷物を積む

も器用に作ったり修理したりした。やがて銃を直しはじめた。銃の修理は結構な実入りとなり、亭主の懐は暖かくなった。そして、酒の味を覚え、酔っ払うたびにおばちゃんを殴りつけた。亭主は毎日酒を飲んだ。そして毎日おばちゃんを殴った。殴られない日はなかった。度重なる暴力でおばちゃんの体は痣だらけとなった。酒代がかさむと亭主は平気で家畜を売り、いくらかあった家畜もどんどん減っていった。そうした日々がしばらく続き、亭主から逃げ出すことをおばちゃんは決心した。こうしたことをボラナの言葉で「お腹が壊れる」という。おばちゃんに限らず、ボラナの既婚女性は亭主に問題があると、しばしば「お腹を壊し」家出をする。朝、起きてみると家の中はもぬけの殻、女房の姿はどこにもいないという具合だ。「お腹」とは「心」のこと。堪忍袋の緒が切れたとでもいうのだろうか、我慢の限界を越えたのだ。乾季のある日、おばちゃんはまだ乳飲み子であった末の娘を背負い、我が家を後にした。それっきり自分の家には戻ってこなかった。

けれども、おばちゃんには頼るべき親族がいなかった。両親はとうの昔に死んでいた。二人の兄がいるにはいるが彼らを頼りにすることは、はじめからおばちゃんの頭の中になかった。彼らは遠く離れたところに住んでおり、おばちゃんとは疎遠であった。おばちゃんが唯一頼りにしたのは、自分が生まれ落ちた出自集団ではなく、亭主の出自集団だった。おばちゃんは、亭主の出自集団の有力者が住んでいる村を目指して、長い道のり赤ん坊を背負



結婚する娘の頭頂部を父親が剃る

い歩いた。道を聞くために立ち寄った村に、顔見知りの夫婦がいた。顔見知りといってもほとんど知らない間柄だったが、彼らはおばちゃんを歓迎して、「今は乾季なのでミルクもろくにないが」と詫言を述べてミルクティを振る舞い、道案内がてら遠くまで見送ってくれた。その後亭主の出自集団の、ある長老がおばちゃんを自分の村に呼び寄せてくれ、おばちゃんはその村に家を建て腰を落ち着けた。その長老の息子が「ボラナの慣習を学びに来た」という奇妙な「白人」を村に連れてきた。程なく、その息子と白人は彼女の家に厄介になった。その白人はわたしのことで、長老の息子とはわたしの調査助手K君だ。

おばちゃんは四人の子どもを産んだ。しかし、三人の子どもたちは亭主の下におり、今のおばちゃんには末の小さな女の子だけが残された。三人の子どものうち、二人は男の子で一人は女の子だ。亭主と三人の子どもは町に住んでいる。子どもたちがどのように育っているかは、噂でしか分からない。長男は十何歳で、すでに中学を卒業している。おばちゃんはしばしば町に出かける。町までそんなに遠くない。村から歩いて二時間かからないくらいだ。だから、その息子たちと町で顔を会わすときもある。しかし、彼らは自分の母親に対して挨拶すらしない。父親からあることないことおばちゃんについて吹き込まれているともいうし、言葉を交わすことさえも父親から禁止されているとも聞く。いや、それとも息子は単にその父親に似てろくで無しに育っただけなのかもしれない。息子から町で無視されると、おばちゃんは心なしかいつもより疲れた顔をして村に帰ってくる。今やおばちゃんに残された、小さな唯一の娘が駆け寄り寄ってきても、「お前は何でお母

さんお帰りって挨拶しないんだい。お前はわたしの娘じゃないのかい？」と八つ当たりする。そんなとき、女の子は小さな下唇を噛み、大きな黒い瞳でおばちゃんを見上げては、もじもじとする。続いておばちゃんの嘆息がはじまる。町で自分に挨拶もしない息子たちは自分の子どもではない。自分の子どもはここにいるだけだ。この小さな娘と長老の息子たち、それだけだ。

おばちゃんは薪を山から切ってきては町に運び、日銭を稼いでいる。ドイツの援助で建てられた学生寮が、煮炊きに使う薪を買ってくれる。おばちゃんは同じ村の女性と一緒に薪を切り出す。背中に運べるだけの薪を括りつけ体を前につんのめらせるようにして、町はずれの寮まで運ぶ。町はそれほど遠くないとはいえ、薪の重さは半端でない。

だから、おばちゃんは昼過ぎにならないと村に帰ってこない。ひとり残された女の子は母親の帰りを待ちわびる。他の子どもと遊んでいても、午後四時くらいに家の扉が開いていると、母親が帰ってきたのではないかと中を覗きに来る。そこにはわたしと助手がいるだけだ。女の子は、それを見た途端がっかりした顔になり、くると背を向けて行ってしまふ。女の子はもう、そんな年齢ではないのだが、まだ母親の乳房を吸いたがる。おばちゃんが炉の前で料理していると、女の子は横から母親の乳房をひっぱりだす。おばちゃんもそれを拒まない。

同じように薪を町に運び日銭を稼ぐ女性は他にもいる。大抵、夫から逃げ出してきた女性か夫を亡くした女性である。彼女たちは町で薪を売って稼いだお金を手にして、そのまま飲み屋に向かい、お金

はあらかじめ飲み代に消えてしまう。おばちゃんは薪を売って稼いだお金でヤギと酒を買う。酒はおばちゃんが飲むために買うのではない。村に運んで売るのが。ヤギは育てる。オスなら肥らせて町の市場で買った値段よりも高く売る。メスならば乳を出すし、子どもも産む。乳はコップ一杯ほどにしかならないが、小さな女の子には貴重な栄養となる。おばちゃんはヤギを増やしてそれを売り、乳牛を買うことを目指している。ヤギの肥育は順調なのだが、酒の商売は芳しくない。誰も彼もがつけで飲むからだ。つけでは売らない、あんたは町で金を払わずに酒を飲んだことがあるかと口を酸っぱくして言っても、何度も頼まれ、今度家畜を売るから金が入るとか、家にはお金がある、明日の朝に家に取りに来てくれれば払うなどと言われると、断りきれない。夜、寝る前におばちゃんは、今日の収支を計算する。誰が何を何杯のんで、誰がそれに対して何杯分だけ払い、誰が誰におごって、おごり分とおごられてない分を分け、おごられていない分は誰がいつ払うと言っていたとか、等々。さらに誰にいくら彼にいくらつけがあるとそらで一人ずつ思い出していく。すべてを思い出し整理し記憶する。そして、つけが随分と貯まっている、いったいこの子をどう

やって育てろというのだと嘆いて床に就く。

おばちゃんは胸を張って、わたしは自分自身で生きていると言う。ボラナでは女性がいったん結婚すると、自分の名前の次に亭主の名前を名乗る。おばちゃんも周りの人からはそのように呼ばれる。しかし、おばちゃんは亭主の名前を名乗ることを拒んでこう言う。自分には亭主はいない。この家には亭主はいない。おばちゃんは薪を売り、ヤギを肥育し、お酒で商売をする。すべておばちゃんの体力と才覚ひとつだ。

おばちゃんの家は酒場となっているので、いつも夕方になると仕事を終えた人々が集まってくる。がやがやとしたなか、みんなが酒を飲んでい。ときには酔っ払って喧嘩ともなる。それもウシが放牧から帰る頃、みんなウシの様子を見に帰っていく。おばちゃんも女の子を背負って、自分のヤギの乳搾りに出かける。炉の炎が、だれもいない小屋のなかを赤く照らしている。腹を減らした犬が食べ物を求めて、戸口から人気のない家の様子を探る。女たちがウシの名前を呼ぶ声が聞こえてくる。そのなかにおばちゃんの声が混じる日は、近い。

(たがわ げん 一橋大学大学院)



未婚の少女。このうち1人が近く結婚するため、記念写真をねだられた。